

コミュニケーションの根底的構造について

—ラカン派（精神分析）の理論枠組による—

檜村 愛子

コミュニケーションの根底的構造を精神分析のラカン派の理論枠組によって提示する。

コミュニケーションとは主体を贈与する過程であり、それは隠喩によって可能になる。すなわち、主体とは、他者の場に生じた幻想の構成物であり、人間が現実認識をそのシステム内部で構成する時間を稼ぐ、「現実」と認識の留保的結合物であり、それは他者の場に支えられているものである。そしてコミュニケーションは、さまざまなレベルで隠喩を構成し主体を贈与するのである。

0. はじめに

社会学において根幹の概念である「コミュニケーション」は、最近哲学や言語学・認知科学等諸学問において、主体の成立と密接な関係をもつ現場として注目されており、また社会現象としても現在、異文化コミュニケーション問題、オタク等のコミュニケーション不全症候、さらに家族の解体や愛の危機、メディアコミュニケーションの隆盛など多くの解明されるべき現代の問題を抱えるものとして注目されている。これらの状況に対し、コミュニケーションを根幹の概念とする社会学の中に、「コミュニケーション⁽¹⁾の中ではいったい何が行われているのか」という根底的分析を行った理論が存在するかと鑑みるに、現在のところまだ貧しく、諸学問のアプローチの困難がすでに示すように、その困難さと難解さが推量される⁽²⁾。とりわけそこでは、言語と主体の臨界状況へと遡行していく試みが必要であると思われる。これらの現状

に対し、精神分析は、言語と主体の臨界状況において固有の与件から遡行し優れた知見を提供している。ゆえに本論は、ラカン派の枠組によって、コミュニケーションの根底的構造についての理論構築を試みたい⁽³⁾。

1. コミュニケーションが「通じる」こと

「どうもコミュニケーションがうまく通じない」「話していて緊張する」、また、「何だか話が合う（通じる）」「話していて楽しい」…といった私達の感触は、いったいどこからやってくるのだろうか。表面的には、言葉を交わし合い、そこに言葉の意味を巡る誤謬がないにも関わらず、「私の言っていることをあなたは全くわかってきていない」「あなたは私の話を聞いていない」といった感想が現れるのはなぜだろう。このような問題は、「メタメッセージ」の理解・流通に着目するベイトソンおよびゴフマンの理論提起⁽⁴⁾や、メッセージを語られたことの厳密な意味に限定するコードモデルへの批判の

中から現れた「コミュニケーションの共有知問題」とそれへの解決を示唆したグライス(1989)の理論、スベルベル・ウィルソン(1986)のレリヴァンス理論などにおいてもすでに論争されてきていることである。しかし、グライスの理論やレリヴァンス理論は、語用論が位置する言語学の限界を出られずメタメッセージを人間の合理的な推量過程へと還元していく傾向をもち(その志向性においては結局事態は分析しきれないことは後の記述で明らかになるが)、ベイトソンやゴフマンにおいても事態の観察に終わり、メタメッセージとは何かといった分析にまで至っていない(ゴフマンはそれについて語ることは不可能だとすでに宣言している-ゴフマン1981)。またルーマンやエスノメソドロジーは、すでにコミュニケーションが通じる(結合する)ということは、「暗黒の中の跳躍」としかいいようのない人間的営みであって、研究者はそれを事後的に観察するしかないのだと「うまく」問題を保留し、もう少し「まじめな」ハーバマスは、他者への信頼が先行的に、まさにコミュニケーション行為への投企として存在するのだとする。しかし、先にも述べたように、メタメッセージにしろレリヴァンスにしろ「信頼」にしろ、結局そこで何が起きているのかは、構造的に解明されているわけではない(5)。コミュニケーションがうまくいく、うまくいかないというとき、そこでは何が行われ行われなかったかを、事後的記述や観察ではなく解明すること、すなわちコミュニケーションの成立条件をより科学的に抽出することが必要であると思われる。

本論では、コミュニケーションの中で主体の成立が賭けられており、他者はコミュニケーションにおいて主体を贈与するものとして現れることを示したい。コミュニケーションがうまく

いくとは、この主体の成立(主体の確信)を与え合うことであり、それは言語学が扱っているメッセージの流通という点で言えばある種の逸脱的特殊現象であり(精神分析において主体は「症候」とであるとされる)、ラカンにおいてそれは「隠喩」として記述される事態である(6)。もちろん隠喩を与え主体が成立するというだけでは、メタメッセージが流通し近代的なメッセージの限界が超越される(ベイトソン)という記述と大差はないのであり、そこで主体が成立するとはどのような構造をはらんでいるのが説明されなくてはならない。

精神分析は、隠喩および主体の成立とは、身体と言語の特殊な結合様態であることを提起した。現象学が遡行しようとした「現前」のみならず、とりわけ近代以降、言語と私達の生(身体)との解離は意識され続けており、言語以前に遡ろうとする幻想は多く産出されてきた。しかし言語以前に主体はないのであり(この発見が言語論的転回である)、主体とは言語以前へと遡られる身体なのではなく、むしろ言語と身体の特異な結合において成立している(7)。そして精神分析における、その結合様態の分析自体は、言語と身体との結合の異常形態としての神経症等の分析において逆照射され構築されてきたものである。そこでまず、精神分析の与件としての神経症や倒錯などの様態をみて、その分析において提示された「欲動」「対象a」「外傷」「幻想」といった概念を検討し、さらに主体の成立の構造を分析したい。

2. 「欲動」「対象a」「外傷」「幻想」

まず「欲動」という概念からみてみよう。「欲動」とは、一般の主体の心的状態を記述するための概念であるが、神経症等特有の症例の

分析の中ではじめて現象的に観察され抽出されたものである。そこで精神分析の観察した道筋と同様、まず神経症等の現象から追ってみよう。

精神分析が対象とした精神の病、神経症や倒錯とは、とりわけ近代固有の症候であり、ある種の（近代の）主体の危機に対する補完的に現出した事態である。そこで主体と世界を巡る近代的図式の成立において立てられる、「私とは何か」「世界とは何か」といった遡行不能な問い（倒錯も同じ問いを立てつつ自身の倒錯的行為の演出においてそれを自ら回収する）とその回答不能性に対し、症状はどのように現れるのだろうか。

例えば、誰かの愛についての（神経症的）疑惑から、「なぜ私を愛しているの」という問いを發し、相手から「賢いから」「美しいから」等々の返答を得るにつれ、愛の確信はますます得られなくなる。言語（シニフィアン）とは部分的分節的なものであるが、神経症者はこの内部であくまで厳密に世界と自身を構築しようとする。普通ならこのような問いを厳密に追求することなく私達は愛を「生きよう」とする。また「君のすべてが好きだ」という厳密性を欠いた返答に十分満足する。とりわけ「君のすべてが好きだ」という隠喩は、自身の確信を得たいという身体的欲望と言語を結合可能にしている（言語の厳密さによる欲望の排除がない）。しかしこれらが不可能な神経症においては、両者の結合がはずれたように、厳密な言語の世界から排除された身体的作用が独立して固有の動きを見せる現象が生じる。そこで生じる身体作用は暗号のようなメッセージを伴っているので、身体と言語との関係がそこで推測されることとなる。例えば神経症者の一類型であるヒステリーにおいては、けいれん発作のような身体運動が、無意識の意味作用を伴って現出する⁽⁸⁾。そして、

フロイトが「神経症者は症状を愛する」といったように、このけいれん発作（症状）は社会生活において困難を与えているように見えつつも、患者自身にはむしろ満足を与えていた（すなわち主体を贈与していた）。なぜ意味作用から外れたこの身体運動が患者に満足を与え主体を贈与するのか。この問いが精神分析において主体の構造を考えるヒントになり、フロイトは、この身体的運動を、主体の構造を考える鍵として、また精神分析の重要な記述概念として「欲動」と名付けた。

欲動は、快感原則（快を取り込み不快を排除する）よりも広い概念として存在する⁽⁹⁾。その運動（反復強迫とよばれる）は『快感原則の彼岸』（1920）においてフロイトが提示したように、わざわざ不快な記憶を反復しようとする戦争神経症者や、母親の不在を糸巻遊びにおいて再演する子供等によって観察された。倒錯行為（サディズムやマゾヒズムにおける苦痛の反復）においても観察されるこの反復的運動は、快不快の分節（主体の成立）を越えた運動であり、しかも先にみたように、主体の成立の危機において、通常とは異なった形態において現出しているものとして、主体の成立に関与し、主体を贈与していることが推察されたのである。倒錯においては意識的な倒錯的反復行為のただ中で欲動の運動は現出しているが、神経症の場合は無意識の場所で駆動している。ヒステリーにおけるけいれん発作という身体運動は本人にも気づかれず自動的に現れ、強迫神経症においては、通常は適度に決定される反極の問題、例えば「愛しているか」「愛していないか」などの問題が、通常はどちらかがうまく無意識に潜在的に保留されているのに対し、どちらもが意識の内に対立して現出し、厳密な決定への志向ないし最終的には決定不能へと導かれることとなり、

患者の思考そのものが両者をはりこのように揺れ動く欲動的反復運動になっていくのである(フロイト1909b)。

このような欲動の関与する症状が主体を贈与する構造について、すなわちなぜそれが主体を贈与するかという問題に関し、さらに欲動とは欲動の対象(ラカンにおいては対象 a-ラカン1964)をその対象物として持つことが与件から導出された。倒錯におけるフェティッシュや、先にみたヒステリー者がすべての言葉(シニフィアン)に対する意味(究極的シニフィエ)として探し求めようとする対象物のように(それは一つのものとして想像されている。ラカンにおいてはファルスとよばれる、ラカン1958a)。言語は基本的に分節的性質を持っているため、主体の全体を名指すことは基本的に不可能である。これを網渡り的に行うのが隠喩という言葉の超越的な機能である(すでにそれは文化の中で、詩的言説等によって観察されることである。ここではファルスが与えられるとされる)が、神経症者や倒錯者のように言葉の厳密性にあくまでこだわり、隠喩を認めようとしなければ、このように言葉のない場(言語化されない場、すなわち身体しかも言語的意味と結合した場)で退行的幻想空間が現出するのであり、それが患者の存在を支えることが推察されたのである。このように、主体とは、言語によってのみ分節される存在なのではなく、それを行おうとすれば、対象とのカップリング(欲動と欲動の対象 a)という幻想空間によって補完的に存在が支えられるような構造体であること、通常の主体においても明示的にはわからないがこのような欲動と対象との結合・運動が主体を支えていることが分析されたのである(10)。

次に「外傷」(トラウマ)という概念を見てみよう。神経症のきっかけとして関与している

のがこの「外傷」と呼ばれる出来事であり、それは、やはり主体の臨界に位置する事態である。外傷は、神経症の分析において、記憶の中から排除され抑圧され、とはいえ、それはやはり主体の一部であり、「抑圧されたものの回帰」として、意味作用とは外れた状態で、さらには代理物となって、先の欲動の運動において現出しようとするのが、やはり分析によって観察された。また外傷は思い出され、言語化され、既存のシステムに統合されることで、症状は解消していくことが発見された。このように言語化されえず抑圧されているが確かに経験された「現実」(11)(分析においては物語化=フィクション化され、これがエディプスの物語となる)を、主体にとって重要な概念として、やはり精神分析は「外傷」と名付けた。

精神分析は人間のシステムを次のように推測する。人間は自身の持続性や安定性を、生物学的レベルから一定以上越えて人工的に維持しつつ緩やかに変化しようとする生き物であるが、新しいできごと(すなわち言語化されていない「現実」)がこの持続性・安定性を脅かしていきなりやって来ると、それは受容できないものとなる。そしてこの新しい出来事に対し緩やかな形で主体と結合可能にするものが隠喩であり、この隠喩が成立しない場合新しい認識システム自体は形成されず、主体は前の持続的安定的構造に自閉しようとする。しかし、部分的分節的な形式的システムである言語システムの内部には全体を語る命題は形成されない(ゲーデルの定理)、そこでは主体は存在しえず、このように隠喩という身体的場を排除すれば、言語の外部に退行的に幻想空間を現出させざるをえない。外傷はそこにおいては言語や認識のレベルには受容されないのだが、症状において象徴的に表れているように、「現実」(=外傷=隠喩)

の代理物は幻想において要請されるのであり、倒錯の空間のように、この幻想空間が主体を代理的に贈与する場となる。

このようなモデルによる治療は、そのモデルに適合的な方針に沿って行われ、それは実践的效果をあげた。すなわち症状は主体の内部システム（認識）と結合できないからこそ生じているので、外傷の言語化（治療）は、隠喩を伴う緩やかな過程である必要がある。分析（隠喩の形成）は、外傷を取り扱いつつ、後にみる他者の機能（愛）を支えとしつつ、対象とする一人一人違う固有の個人のシステムの内部と、意味作用から外れた言葉（無意識）を手がかりに、進められたのである。

このような問題圏は、決して特殊な病的な人たちのものではない。外傷は例えば、戦争神経症にみられる戦争という異常事態や、交通事故・天災などの不意打ちの、そして主体にとって統御不能な事態においても急性の神経症を引き起こすものとなる。それらが、主体の存在を大きく脅かすことは、私達にも推量可能なことであるが、科学のない時代、日食や天災のような外傷を神という隠喩で受容できた頃と比べ、近代においては、科学によって、より主体は隠喩を形成しづらく、外傷に弱くなっているともいえるだろう（実際近代<＝神の死>という出来事自体がずっとこの間外傷だったのである）。近代に住む私達は、片手に科学を持ちつつも、近代以前の人々と同様に、常に世界や私達を、現在あるがままの、または、私達が考える平和な望ましい事態として将来も存在するものとして、何の根拠もないにも関わらず常に信頼し続け、そうする必要があるからである。このような世界と主体に対する信頼（＝世界と主体の成立）を、精神分析では、「幻想（ファンタズム）」とよんでいる。通常の主体を支えているのはこ

の幻想であり、隠喩によって成立し維持されるのはこの幻想であるとされる。

以上のように、これらの症状の分析から、主体は、厳密な言語の内部には生きていないことが逆に推量され、そして通常の主体において、言語と身体の隠喩的結合には、これらの症状では目に見えて現出したような欲動と外傷の隠喩化が関与していることが推量されたのである。治療はこのような欲動と外傷を相手にそれを加工化していく作業であり、外傷の言語化（隠喩化）および欲動と言語の結合によって、分析における他者の支えを得ながら、再び患者が現実身体を開いていくことである。外傷とは歴史的にみても新たに出会った「現実」であり、主体はこれを認識の向上において克服していくのだが、しかし人間にとって究極の乗り越え得ない外傷もあり、それは死である。近代以前、死は文化と共同体の場所に存在したが、近代以降、死についての社会的隠喩は解体した。明晰な認識を維持しつつも死は受容したくない神経症や倒錯とは、必然的な近代の病であり、精神分析の固有の作業（そしてその理論）は、あくまで死を認めたくない主体に対し、認識としては死（主体とはフィクションであること）を受け入れつつ隠喩の場所（主体の場所）を確保することであり、それゆえ精神分析は近代という外傷に対する文化的レベルにおける知としても優れた理論を提起したのである。

事態をさらに詳しくみるため、精神病の様態も検討してみよう。精神病では、この退行的な幻想の構築も困難である。神経症者や倒錯者においては、いまみたように隠喩の代理物として別様の幻想をその独自のメカニズムにおいて形成するが、精神病者においてはこのような退行空間（外傷のシミュラクルーあらかじめ主体にとって飼い慣らされた、見せかけは外傷だが外

傷の代理物としてのシミュラクル)を形成すること自体不可能のように思われる。それゆえ、精神分析では、精神病においては隠喩そのものが体験されていないと推測した。さらに精神病における隠喩の不可能性は次のような事例においても確認しうる。すなわち、彼らは認知能力や知覚には問題はなく、計算等の数学の問題においては高い能力を示すこともあるが、どの服とどの帽子が合うかといった判断において決定不能に陥ったり、人々の言っていることの意味(隠喩)がよくわからないとか、人々の日常において「自明であること」が欠けているのである(12)。神経症者と同様に厳密に言語内部で物事を解決しようとし、「頭が堅い人」といったイメージも持たれる。が、かといって神経症者のように症状において幻想を形成しようとする補完的機能が働かないため、主体の構成は非常に困難である。例えば彼らは、光や音がぎざぎざして痛いと感じるが、ここでは、ハイデガーのいうような、言語の臨界に成立する芸術的な幻想の世界としての親和的な世界も存在しないのである。彼らは、神経症者達のような補完機能が働かないため、通常はゆるやかに結合している象徴世界全体を疑い始める。そこでの彼らの象徴世界の再構成が妄想形成である。しかしそれは崩れかかってくる世界を両手で押さえているような恐怖を伴った試みであり、神経症者達の退行的幻想のような、捻れているにせよ与えられる安らぎはみられない。知覚や認知能力に問題がないにも関わらず、現実認識が崩れて来る精神病者の症例を確認すると、現実認識や象徴世界の構築と維持のためにこそ幻想と主体の確保が必要であることが逆に推測される。そして幼児期に隠喩と幻想を獲得した主体の場合は(このプロセスは次にみる)、何らかのやり方において主体を構成するメカニズムの

駆動の余地があることがここからも両者の差異として観察しうるのである。

以上、神経症、倒錯、精神病などの与件から、欲動、対象a、外傷、幻想といった精神分析の概念を辿ってみた。次に、このような分析から、主体の構造とその構成プロセスについて分析してみよう。

3. 主体の構造

2でみてきたような与件から、精神分析学は、主体の構造について一つのモデルを立てた。フロイトはそれを「エディプスコンプレックス」という物語において記述し(それは患者の物語=神話、の再解釈である)、ラカンは「父の名の隠喩」として、エディプスの「父」「母」をより科学的に現象として記述しようとした。すでに先にも述べたように、人間において、主体とは、生物学的に遡行できる身体の中には存在しない、人工的な文化的構築物である。それが「母」の世界から、「父」という文化的跳躍(=掟、法としても記述される)を引き受けることであり、言語を受容すること、隠喩(言語と身体の結合)を可能にすることであると解釈された。

ここで、ラカンにおいて、父とはほぼ言語と等値であるが、言語が特権的场所を占めているわけではない。鏡像段階論(1949)において身体のイマージュがすでに隠喩と幻想を現出させていることを述べているように(まだ身体の統御不能な子供が、鏡の前で自身のイマージュを得、それを自己の全体性の先取りとして同一化とする(13)、それはむしろ他者の機能に助けられつつ、新しい現実に対応していく構造体の一貫性を人工的に維持しようとする、隠喩と幻想の機能である。言語システム(シニフィアン)

はとりわけ生体とは異なるシステムでありつつ、この、隠喩と幻想の機能とうまく結合して人間を高度に発達させたものである(14)。

そこで、他者に助けられつつ、隠喩と幻想を獲得していく過程を、幼児分析などの与件から、さらに再構成してみよう。ここで、他者(母親)の機能は非常に重要である。統御不能な未熟な乳児が、隠喩と幻想の場(エディプスの場、父の場)を無理のないように獲得していくためには、少しずつ乳児をこの場へ誘導していくことが必要である。ウィニコットの「ほほよい母親」の理論が示すように、そこでは全く面倒を見ない他者は言うに及ばず、完全に乳児を先取りして手を尽くす他者においても、それは乳児を新しいシステム形成へと誘導しないので主体の形成に問題を生じさせることになる。他者は、人間が遺伝学的な動物的身体(それは可塑的な身体でもある)を越えて自己を形成するに当り、新しいプログラム(すでに他者の中に文化的構築物として蓄積されたプログラム)を、乳児の原初的なレベルと結合可能な形で贈与し(もちろんその過程は現在解明されていない)、生育を助ける役割を担っているからである。すなわち、母から父への、言語と文化への跳躍を、他者に対する信頼を担保に、成功させなければならない。

すでにこの問題圏は、社会学においてもミードによって指摘されている。「態度取得」という概念である(15)。ミードは、態度取得を生得的生理的過程であるとしている。すなわち、最初は空腹時緊張状態を放出する自動的身体運動として乳児の泣き声があったのに対し、それを聞いてとんでくる他者とそこで与えられるミルクによって、泣き声に対する人間の態度(反応)という文化的構築物を乳児が(態度)取得し、それによって、今度は他者を呼ぶために泣くよ

うになることである。ミードは、この態度取得を、コミュニケーションを支える最も重要な基礎原理であると指摘しながら、同時に、自動的に習得される生理的過程であるとして、それ以上分節していない。が、精神分析は、ここでの他者の機能に適切さが欠けていれば態度取得にも問題が生じることを指摘しているのである。

クラインは、態度取得に問題が生じた子供の分析において、他者が来てミルクを与えられても、混乱し泣き叫んでミルクを飲もうとしない子供の例を紹介している。それらの与件が示しているのは、他者とは、単純な現実の他者の記号(表象)なのではなく、先にみた跳躍の担保となる、子供の中で幻想的に構築された存在である(子供の内部システムとの隠喩的結合に支えられ、すでに子供の内部世界の一部となっている)ということである。すなわち、子供にとって生死と関わる他者の在不在という問題は、圧倒的に現実認識の貧しい子供において、まさしく隠喩という形で、子供の貧しい内部システムと結合しているため、例えば、子供の要求と母親の在不在のリズムのような、隠喩結合に関与している現象に圧倒的混乱がみられた場合、現実のミルクよりもリズムの混乱の方が、子供のシステムにとって決定的な問題となり、子供のシステムを破壊してしまうのである(このようなプロセスそのものは大人のシステム形成と維持の問題ともパラレルである。すなわち重要なのは、現実と既存の主体及び生体システムとの結合関係なのであり、ゆえにこそ急激な現実の変化に対し、主体は現実を閉ざしてもシステムの維持に向かうのである)。

もう少し問題を詳しくみるために、フロイトの有名な糸巻遊びの例で見てみよう。子供は、母の不在を埋めるように、fort(いない)といって糸巻を放り投げ、Da(いた)といって糸

巻を手繰り寄せることを反復する。糸巻は、母親（他者）であり、対象と他者が出現するときのみ現前する主体を表象している（とフロイトとは精神分析の与件から直観した）。その遊び（事態の再演）の中で在—不在を再演する糸巻は、現実には不在の時には存在しない母親および自己を、遊びの中では不在においても「不在」として表象し、そのことで糸巻として表象されている母および子供は、不在の時にも「不在」という記号を持つ在として、一定の安定した存在を獲得することになる。この糸巻が移行対象とよばれる母親の代理物であり、移行対象である糸巻は、言語へと移行していくためそうよばれる（言葉とはまず不在のものを指し示すものであることを思い出そう）。これが幻想の構築であり、幻想の構築物である主体と世界の獲得という出来事である。すなわち、欲動の対象（それは母でもある）の現前においてしか（間歇的に）稼働しないシステムである主体が、この原初的システムを越えて、対象の不在（対象によるシステムの駆動の不在）においても存在を獲得することになるのである。そしてその幻想的世界の構築を可能にするのは、まさに他者の在不在の適切なリズムと、それとの結合を基礎にそこから離陸する主体の隠喩と幻想のシステムのより高度な構成（具体的には言語システムとの結合）なのである。主体が言語と結合するためには、あくまでこのようなプロセス無しにはありえなかったのである（精神病者における言語の困難が示すように。しかし一度結合した言語システムは、その後ますます主体のシステムそのものを大きく変えていく—具体的には幻想そのものの構成を困難にするが）。

このように主体の構成とは、現実を先取りした（同様、誤認したとも言える）幻想の構成であるが、しかしこのような隠喩と幻想の構成の

事態は、現実を厳密に演算しているものでないにせよ、全く現実と切れた出来事なのではない。子供の現実認識が実際に進んでくると、母親が不在の時母親はどこにいるのか、現前に存在しないものは現実に世界のどこに（たぶん）存在するかといった事態は学習されるようになる。子供における言語との結合は（後にみるように）最初は幻想と連続しているが、言語は分節性を増していく。幻想とは、いってみれば、遺伝的プログラムを越えた学習を行う生物学的身体を支え、とりわけこの学習にかかる時間を支えるための跳躍的先取りの構成物である。近代科学が出現する前には、事態の説明不能性は神という隠喩が支えてきた。さらに資本主義への移行において新しい快楽の学習の時間を稼ぎ主体の解体を防衛した隠喩と幻想の一つとしてプロテスタンティズムの倫理があっただろう。幻想とはこのような「現実」（カントの言うものの世界であり言語化されていないもの、例えば先の乳児においては他者の不在）の内化であり、内化の外にあり経験されたと解釈される「現実」が先にみた「外傷」である。コペルニクスやアインシュタインの発見、ゲーデルの定理の出現、アウシュビッツ、エイズなどは、人間の歴史における外傷であった。それは学習と現実認識において時間をかけて受容されていくのだが、神が死んだとき世界を「自然」への信仰が代替した（18c）ように、外傷は幻想の中にうまく内化され主体は危機を逃れうる。糸巻遊びにおける母親の不在は、実際には経験不可能な「現実」であり、またそれを実際に認めることは自身の死と等値なので論理的にも不可能な不在であるが、在の負の場としてこれを内界に受容可能にするのである。例えば、不在という「現実」は、主体の中にある快不快のうちの不快の極限值として翻訳されるだろう（実際私達にとって死と

は、不快の極限としてしか想像不能なことである)。このように外傷の内化は、ある種の跳躍的翻訳すなわち隠喩によってなされる。それは厳密な論理的結合ではなく、他者の場において、発育のプロセスとしても他者を担保にしながら他者の振舞いに誘導されつつ獲得していく（ここにおいて他者は主体にとって絶対的意味をもっているのである）。主体と世界はまさに他者の場において形成されるのである。

さらに、その跳躍的翻訳＝隠喩の結合に関与していると思われるのが先にみた欲動である。糸巻遊びの反復運動は、反復的運動によって示されている欲動が、母の代理物である糸巻（幻想）を構成するのに関与している。欲動は、精神分析において抽出されたように（また治療空間でも利用される「遊び」に表れるように）、通常は観察しがたいような、固有の自由な移動可能性をもつ運動を備えており、ここでみてきたような、人間の可塑的なシステム形成を支え、さらに身体と言語の結合を支えている。

以上のように、隠喩と幻想の構成という主体の原理的構造についてみてきた。次に、言語システムがこの構造とどう関与しているのかをみることで、コミュニケーションの問題へとさらに近づいていこう。

4. 隠喩

3でも触れたように、言語システムは、人間の生体システムの外部からやってきた。ゆえに、厳密な演算結合によって構成可能な言語システムは、もともと人間の生体システムとはある種のずれを持っている。このずれをうまく解消しながら言語と結合することで人間は大きな発展をしたのだが、その結合を支えたのが隠喩である。隠喩がなければ人間と言語が結合すること

は困難であり、また隠喩がなければ人間にとって言語が魅惑的なものとはならないであろう。これはコミュニケーションにとっても同じである。通常の主体も、神経症者がすべての言語の先に求めるファルス（究極的意味）に、やはり魅かれつつ言葉とコミュニケーションへ誘導され、しかし神経症者とは違い、言葉を排除してファルスだけを求めるのではなく、隠喩の中でこれを享受する。さて隠喩とは、文字どおり言語学における隠喩であるが、まず言語学において隠喩はどのように扱われているのだろうか。

言語学において隠喩とは何かという問題については多くの論争があるが、結局シニフィアンとシニフィエの一義対応によって支えられている言語学にとって、まさに隠喩とは外傷的出来事であり、理論の中心からは例外的出来事として外されることが多い。しかし精神分析は、まさにこの例外的出来事が主体を支え、さらには主体にとっての言語を可能にし言語全体を支えているものであることを提示した。

神経症の記述においてすでにみたように言語の内部では決定不能な出来事を隠喩は決定可能にする。 $2 + 2 = 4$ という演算の結合と違って、人間の経験する社会的事象は両義性や決定不能性を抱えている。例えば、人は、ある人を愛する感情と憎む感情という背反する感情を同時に持ち合わせている。これは、主体が最初外界の対象物を取り込むとき、それは異物＝不快を内化＝快にしていく運動であり、そこにおいて対象とは快と不快の両者の対象であった記憶からいっても、人間にとって原理的な性質である（倒錯において外傷を形容する苦痛がわざわざ望まれるのも、それは苦痛＝外傷こそは、対象が与え、同時にそこで主体を贈与するものだからである。しかし倒錯での苦痛＝外傷の再演は、現実の外傷を回避しシミュラクルとして退行的

幻想を構成するものであるが)。このように言葉の演算的結合と身体のずれは、高度な演算体系が確立するのでなければ（いま言った愛の演算の方程式がいつしかできるだろうか?!）そのままでは結合しえない。推量しうるのは、「欲動」という言葉で記述したような自由度と可塑性の高いメカニズム等において結合が支えられていることである（実際、分析でみられるような無意味な言葉の反復は欲動が関与しているのであり、言葉と欲動の関係こそ精神分析の発見したことである）。精神病者において、例えば微妙な言葉の結合が不可能であるように、また彼らや強迫神経症者（症例鼠男）にとって、愛と憎しみはどちらかでなければ絶対に許されず、愛が強ければ強いほど、その両義的感情を絶対に受容できないように。

このように言葉の結合は隠喩的結合によって支えられ、まさに意味作用そのものが隠喩的結合によって支えられていると思われるが、もう少し現象的に見えやすい例、意味作用の逸脱と思われるような、先にみた言語学の対象とする隠喩をみてみよう。すなわち隠喩という意味の逸脱現象がなぜ幻想を可能にするかについてみてみよう。

例えば世界宗教と呼ばれるレベルの宗教の言説は、トートロジックな隠喩に満ちている。「神を試してはならない」「信じるものこそ救われる」といったほとんどパラドクスに満ちた言説は、その宗教への信仰を疑わせるのではなく、逆に、確信を与えるものとなる。また、「人間は一本の葦である」や詩の一篇などは、やはり私達に感動と主体の確信を与える。これらの言説は、神経症的な遡行不能な問いを停止（留保）し、または、そのまま完結—充実した世界の意味を与える（かの幻想を可能にする）（普通は、シニフィアンは常に次のシニフィアンへと

送り返され、意味は完結—停止しない）。この意味の逸脱現象は、いったいなぜにして幻想の成立を可能にするのだろうか。

ここで言葉とは、まず声であったことを確認しておかなくてはならない。糸巻が母親を表象することを可能にしたように、そしてその時、同時に「fort-Da」というかけ声が伴われたように、主体=母親（なぜなら主体の運動は母親によって贈与されるから）は、声によっても代替される。糸巻が移行対象であるように、声も移行対象である。乳児にとってまず言葉とは分節される前の母親の声（母）であったことをここで確認しておこう。

しかし、現実認識が進むにつれ、母親の声とは実は言葉=シニフィアンであったことが認識されることとなり、子供は一つ一つのシニフィアンを獲得していくと同時に、母親全体を再現していた声の幻想的力を喪失していくこととなる。そこで今度は言葉の内部でさらに全体性を現出させるべく意味作用のレベルで声へと回帰しようとする装置が働く。これが隠喩である。「fort-Da」は、対立物の結合をはらんでおり、通常に分節レベルでは決して結合不可能であるにも関わらず、そこでは歌のようなリズムにおいて連続性を獲得し（言葉がもの化=声となる）、幻想的力を回復する。子供は、また「犬はニャンニャン、猫はワンワン」といった言葉遊びが好きであるが、これも声（幻想）のレベルに回帰しようとする隠喩である。先にみた、宗教的言説や詩的言説は、あるしかた、例えば、原初的感覚（リズム、視的イメージ）に訴えたり、言葉の指示作用を停止させ逸脱させて、ことばがもの（声）であった感触を再現し、この声のレベルへ回帰することで、幻想を可能にしているのである（宗教的言説等においては、ほとんど分析的手法に近い技法において、既存の

システムから離脱させるためにパラドクスが使用される)。

5. コミュニケーションの根底的構造について

以上、主体の成立にまつわる構造—隠喩という事態を見てきた。冒頭で述べたように、コミュニケーションは主体を贈与する過程であり、それは隠喩を可能にする過程である。ここで注意したいのは、発せられる言葉は発せられる本人にとって自明な本人の所有物ではないことである。いままで見てきたように、言葉と主体の間には溝がある。精神病患者は、話していることが自分の言葉だという感触をついにもちえない。まず他者が隠喩を贈与する前に、主体が自身で自分の言葉を言っているという確信、自分の言いたいことを言っているのだという確信を持つことについて、それは自明な出来事ではないことを確認しておこう。その上で、他者は隠喩を与え主体を贈与することをみていきたい。

そこでコミュニケーションの構造であるが、まず他者は、最初欲動の対象であったからそれだけで特権的に主体に充実した全体性を与える力を持っている。主体は他者を担保にしつつ構成されるものであり、他者の場において形成されるものであった。しかし、言語を習得し、世界を分節するようになり現実認識が進むと、原初的作用は機能しなくなる。他者は対象aといった加工された形態においてその作用を受け取られることになる。倒錯者におけるフェティッシュのように。このようにまず第一に、メッセージを超越した場所で隠喩は働く。コミュニケーションにおける、視線や表情、うなづき、相づちなどは対象aとして隠喩を可能にするものとして機能すると考えられるだろう。初めて出会った人々が笑みによって覆われ、うなづき、

相づちなどが頻出すること、隠喩である挨拶や儀礼⁽¹⁶⁾が頻出することはすでに観察されている。また言葉が受け取られているかどうかという不安は、うなづき等々によって支えられる。会話分析が示すように相づち等が消失すると、発話者は発話を続けることが困難になる(グッドウィン1981)。

しかし、恋人達が黙って見つめ合っているように、常に強い幻想に支えられてコミュニケーションは進むわけではない。コミュニケーションの中では言葉が交わされるのであり、言葉は現実認識と分節性を伴っている。うなづきや相づち、視線、表情などノンバーバルな作用は、会話の中で、すでに会話の限定を受けている(もちろん会話はうわの空で相手の視線に見惚れたり、何を話しても常に一つの幻想へと終結していく例などこの限りでない例はある)。そこで第二にメッセージレベルで、メッセージの逸脱作用としての隠喩が出現することになる。ジョークや格言、さらにはお世辞のような儀礼など、コミュニケーションにおいてコードモデルにとっては無意味なメッセージは、こうしてむしろコミュニケーションの中核を支える機能を果たすことになる。

さらに第三に、言語の内部でまさに、意味作用を支えている隠喩がある。「私のちょうどいたかったことを相手が話してくれた」という思いが起こるのはこのレベルである。コンピュータやロボットにできない人間の会話のレベルはここに存在する。他者は同じ欲望を持ち、同じ構造を持ちながら、ほどよい遠さを持つ存在として、不意打ちのように、新しい言葉の結合を与えてくれ、主体が解体しない程度の、内化可能な外傷(暴力)を与えてくれるからである。それは、レリヴァンス理論等の合理的効率的な意味結合のレベルでは説明しきれないものであ

る(17)。

このように3つのレベルの隠喩は、いままで、ノンバーバル・バーバル、メッセージ・メタメッセージといった線引きにおいて解釈されてきたが、本論でみてきたように、それらはそれぞれ異質なものではなく、まさに言語結合とコミュニケーション全体を同様の構造において支えているのである(ゴフマンが生涯追いかけた、儀礼、役割距離、free talk等の現象とは、異質なレベルのものではなく、すべてコミュニケーションにおける隠喩だったのである)。このように、コミュニケーションの根底的構造とは、そこで隠喩が求められ、主体が贈与されることである。もちろんそれは今日ますます困難であると同時に、高度な隠喩の贈与の可能性にも満ちているのである。

6. コミュニケーション分析に向けて

最後に、今後の課題として、以上のように展開してきたラカン派の枠組とコミュニケーションの根底的構造についての理論によって、現実の社会のコミュニケーション分析にどのような可能性と展望が開きうるかについて触れておきたい。

まず現在、社会学において決定的なコミュニケーション分析の実践的方法は存在しないように思われる。確かに社会学においても、社会的資源や権力の水路としてコミュニケーションを規定していたようなコミュニケーションのコードモデルへの批判がなされ(言語論的転回)、了解と再帰に基づくモデルに現在代わられてきている(エスノメソドロジー、ルーマン)。が、そこでは例えば成員が明らかに誤解の上でコミュニケーションを続けようともコミュニケーションが接続していればそれは問題ないとするの

であり、その接続の側に身をおくだけのコミュニケーション論とは、要するにすでに成立した社会システムの側に身をおきつつそれを自己記述している社会理論でしかないだろう。確かに主体の中で起こっている言語結合や認識過程はほとんど闇の中であり、精神分析が個人的職人技で、しかも自らの身体をコミュニケーションのコンテクストの内部においてでしか把握しえない症候を、社会学が取り扱うのは困難である。しかし、エスノメソドロジー内部から会話分析の硬直性に対して行われた批判に見られるように、成立している現在のシステムの自己記述とは、どのような社会的作用の変数による構成物なのかを、自己記述においても自覚的に問うこと、例えば、ブルデュー(1993)がベストセラーとなった『世界の悲惨』において行った面接調査において、面接者(社会学者)と被面接者の社会的位置と効果のコンテクストの内部において調査の実定性を測定しようとしたように、コミュニケーションの了解と再帰を可能にしている作用と変数を取り出す営みが必要だろう。そこでは主体の構造についての変数を欠くことができないはずである。例えばブルデューのハビトゥス概念は、主体の一定の自律性と自閉性とその社会的形成を示している点で魅力的であるが、しかしそれはミクロなコミュニケーションレベルで起こること、とりわけ言語との接続を何も語りえない。ラカンのモデルは、主体が、一定の自律性と自閉性を持ちつつ、そのシステムの駆動のもとで内部に言語(シニフィアン)を結合蓄積し、そしてその蓄積そのものによって自己組織的にシステム変動が起こる過程を語る可能性を持っている。すなわちコミュニケーションにおける主体の一定の自律性、自閉性と、それが、流通する言語に与える特異な作用との関係を語りうるモデルを提供していると思われ

る。

さらに、ラカンの枠組は主体の構造の可変性について、そのプロセスを記述しうる理論装置を持っているので、例えば冒頭で触れた「コミュニケーションの危機」という問題構成すら、誰にとっての何の危機なのか再構成可能なものとすることもできるだろう。例えば他者と話をするのが困難になっていく社会の中で、それでもコミュニケーションを規範として要請する力は何なのかという問いとして建て直すことさえできるし、またコミュニケーションにおいて主体を支えていた構造が、とりわけテクノロジーの配給する快樂によってどのように代替されつつあるかといった分析を可能にするだろう。

実定性のあるコミュニケーション分析に向けては、言語学そのものの革新とさらにそれとの研究の結合が不可欠だが、具体的にはチョムスキーの生成文法理論と主体の構造のエコノミーの結合、各言語における言語の使用（隠喩）の歴史といった研究のさらなる充実が必要だろう。ゴフマンが発掘し会話分析が丁寧に拾い上げてきたコミュニケーションにおける隠喩システムの数々は、言語学の臨界に位置し社会学が蓄積した財産であるが、さらにその隠喩の社会的効果や社会的構成の研究、またブルデュー(1982)のコミュニケーション理論で主張している幻想の社会的構成とその転移効果（精神分析では最初の母親に対するような他者への強い幻想の投影の成立を転移とよぶ）の測定などは、社会学が進めなくてはならないことである（なおブルデューにおいてはコミュニケーションの場をすべて転移に回収しており、欠陥をもっていられると思われる）。

このようにコミュニケーションという概念自体、社会の現場を指し示す概念であっても、同じ言葉で語られる現実、多くの構造の質的差

異をはらみそれらに支えられているはずであり、ラカン派の枠組により、他者、幻想、シニフィアンといった変数をみていくことで、現象がより分節可能であると思われる。

注

- (1) ただしこの論文におけるコミュニケーション概念は、ゴフマンのいう対面コミュニケーションに限定し、メディアコミュニケーション等の問題は取り扱わない。
- (2) その中でも大澤の仕事は、この困難をはらんだ領域にアプローチし、主体が他者とコミュニケーションの場で生成することを論じてきている。
- (3) 一方で、エスノメソドロジー、ゴフマン、フーコーをはじめ社会学には、精神医学の権力批判についての優れた業績がある。しかし、これらの研究が完全に精神医学と精神分析を脱構築不可能なこと、すなわち近代の知が依拠する象徴世界の脱構築が不可能であることなどは、「権力」概念に自覚的な構成理論内部においてすらすでに気づかれている。社会学と精神分析の関係については椋村(1993)。またデリダ(1967)、ミレール(フーコー1977、ミレール1989)のフーコー批判参照。この問題については別稿で論じたい。
- (4) ベイトソンとゴフマンの提示した問題については、阪元(1989)が優れた整理をしている。
- (5) 椋村(1993)では、会話分析、ハバース、ゴフマン・ベイトソン、ミード、ゲーム論、ルーマンそれぞれの理論的限界について論じ、それぞれの理論の問題提起に対するラカン派の枠組による示唆を述べている。
- (6) ラカンの隠喩概念は、シニフィアンの論理としての隠喩と換喩の理論(1957)、父の名の隠喩理論(1958b)、主体の隠喩理論(1961)等において展開されているが、ここではそれらの概念から再構成し

- ている。
- (7) ラカン派における「身体」は、現象学的な身体ではなく、後にみるようにそれ自体すでに隠喩として外から与えられるものであることに注意。ゆえに厳密には、言語と身体が結合可能なような「身体」が隠喩においてすでに形成されていることが必要となる。この「身体」形成に失敗しているのが精神病者である。注14も参照。
- (8) ヒステリー（及び症例ドラ）、強迫神経症（および症例鼠男）についての詳しい分析は、榎村（1993）。
- (9) 竹中（1993）参照。フロイトの一次過程と二次過程の質的差異について詳細にテキストを検討している。
- (10) 真理の決定不可能性と相対性についての主張がはびこる中で、分析哲学のデヴィドソン（1981、1984）は、真理の实在論を展開し、ここでのラカン派の主張のように、主体が実践の中で真理を生き抜くことを、人間が欲望を持つ存在であることから論じようとしている。
- (11) 精神分析における「現実」とは、再認識される世界の現実ではなく、認識の臨界にあるものである。この論全体は、システム論的記述をとっているが、通常的环境—システム論との相違はここにあり、「現実」が語られる権利は、外傷の回帰という現象によっている（原語はle réel）。
- (12) ブランケンブルク（1971）のアンネの症例。
- (13) 鏡像段階論は、純粋に論理的段階としての記述であって、もちろん現実に一挙的な構造の贈与があるわけではない。糸巻遊びのように反復運動の中で主体はシステムを獲得していくはずである。むしろ身体イメージの贈与とは、このあとでみる幼児分析（やもちろん成人の分析・夢の身体など）において、主体の危機的局面における「分断された身体」というイメージが報告されることより逆に再構成されうるものでもある。
- (14) 言語獲得以前の社会化の問題については、教育心理学において優れた観察分析がある。麻生（1992）、やまだ（1987）参照。
- (15) ミード理論の再発見とその重要性の指摘については、後藤（1987）、西原（1993）参照。
- (16) ゴフマンが鋭く見据えたように、儀礼はコミュニケーションを支える根幹の概念である。榎村（1993）では、西洋近代（18c、19c）における儀礼の成立から、儀礼がいかにか近代的コミュニケーションへの移行を支えてきたかについて論じた。これについてはまた別稿で論じたい。
- (17) 言語の結合に欲動が関与しているということは、人間が幼児期言語を習得するとき、さらに成人になってから新しい言葉を学習するときにも、つねに対象関係が駆動している可能性を持っているということである。ゆえにシニフィアンの結合関係は人間としてのある種の類似性（同じ欠乏と同じ苦痛、同じ欲望を持つということ、これがデヴィドソンのいう、翻訳の不可能性や文化相対性を越えうる人間の「真理」の基盤である）と、個人的体験の個別性をはらんでいるのである。これが他者との近しさと遠さを決定し、ここでの隠喩を支えている。例えば、「海」というシニフィアンは、「地球においては海の面積の方が大きい」といったときにはほとんど個別のイメージは駆動せず記号の送り返しの中で言語は進行しうる（精神病者はここでつまづかない）が、「海のそばにすんで最後は死にたい」といった相手の言葉に対しては、海が持つ自身のイメージ—砂遊びをした記憶、湘南の土色の海、太陽の熱の感触、または個人的な恋の記憶などなどが喚起され、送り返される言葉が選ばれるはずである。「祖父は漁師だったの、彼は海で死んだわ」…言葉を受け取る側にはなかったシニフィアンの結合関係は、自身の「漁師」という言葉にまた新たなシニフィアンを付加していくこととなるだろう。

文献

- 麻生武 1992 『身ぶりからことばへ』 新曜社
- Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit* =1978 『自明性の喪失』木村他訳 みすず書房
- Bourdieu, P. 1982 *Ce que parler veut dire*, =1993 『話すということ』稲賀繁美訳 藤原書店
1993 *La Misère du Monde*, Seuil
- Davidson, D. 1981 *A Coherence Theory of Truth and Knowledge*, =1989 「真理と知識の斉合説」丹治信春訳 『現代思想』6月号
1984 *Inquiries into Truth and Interpretation*=1991 『真理と解釈』野本他訳 勁草書房
- Derrida, J. 1967 *L'écriture et la Différence* =1977 『エクリチュールと差異』若桑他訳 法政大学出版局
- Foucault, M. 1977 *Le Jeu de Michel Foucault*, in *Ornicar?* 10 = 1987 『同性愛と生存の美学』増田一夫訳 哲学書房
- Freud, S. 1896 *Entwurf der Psychologie* =1974 「科学的心理学草稿」小此木啓吾訳 『フロイト著作集』第7巻 人文書院
1905=1969 「あるヒステリー患者の分析の断片」『フロイト著作集』第5巻 細木他訳 人文書院
1909=1969 「ある5歳男児の恐怖症分析」『フロイト著作集』第5巻 高橋他訳 人文書院
1909b *Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose*=1983 「強迫神経症の一症例に関する考察」小此木啓吾訳 『フロイト著作集』第9巻 人文書院
1920 *Jenseits des Lustprinzips* =1970 「快感原則の彼方」『フロイト著作集』第6巻 小此木他訳 人文書院
- Goffman, E. 1967 *Interaction Ritual* = 1986 『儀礼としての相互行為』広瀬・安江訳 法政大出版局
1981 *Forms of Talk*, Unibersity of Pensilvania
- Goodwin, C. 1981 *Conversational Organization*, Academic Press
- 後藤将之 1987 『ジョージ・ハーバート・ミード』弘文堂
- Grice, P. 1989 *Studies in the Way of Words*, Harvard U. P.
- Habermas, J. 1981 *Theorie des kommunikativen Handelns* 1985 『コミュニケーション的行為の理論』河上倫逸他訳 未来社
- Juranville, A. 1984 *Lacan et la Philosophie* = 1991 『ラカンと哲学』高橋哲也他訳 産業図書
- 櫻村愛子 1993 「コミュニケーションの根底的構造について——ラカン派の理論枠組による」東京大学大学院社会学研究科修士論文
- Klein, M. 1921-61 *The Writing of Melanie Klein* =1983-85 『メラニー・クライン著作集』1~7 小此木他訳 誠信書房
- Lacan, J. 1945 *Le temps logique et l'assertion de certitude anticipée. Un nouveau sophisme*, in *Écrits* =1981 「論理的時間と予期される確実性の証言 新しいソフィスム」『エクリ』3 佐々木他訳 弘文堂
1949 *Le Stade du miroir comme formateur de la fonction du Je, telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanalytique*, in *Écrits* =1972 「分析的経験の中で明らかにされた、<私>の機能を形成するものとしての鏡像段階」『エクリ』1 佐々木他訳 弘文堂
1957 *L'instance de la lettre dans l'inconscient ou la raison depuis Freud*, in *Écrits* =1977 「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」『エクリ』2 佐々木他訳 弘文堂

- 1958a Die Bedeutung des Phallus, in *Écrits*=1981 「ファルスの意味作用」『エクリ』3 佐々木他訳 弘文堂
- 1958b D'une question préliminaire à tout traitement possible de la psychose, in *Écrits*=1977 「精神病のあらゆる可能な治療に対する前提的な問題について」『エクリ』2 佐々木他訳 弘文堂
- 1960 Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien, in *Écrits*=1972 「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」『エクリ』1 佐々木他訳 弘文堂
- 1961 La métaphore du sujet, in *Écrits*=1977 「主体の隠喩」『エクリ』2 佐々木他訳 弘文堂
- 1964 *Le Séminaire Livre 11 Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Seuil
- 1975 *Le Séminaire Livre 20 Encore*, Seuil
- Le Séminaire Livre 1 Les Écrits Techniques de Freud* =1991 「フロイトの技法論」小出他訳 岩波書店
- 1978 *Le Séminaire Livre 2 Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*, Seuil
- 1981 *Le Séminaire Livre 3 Les Psychoses* =1987 「精神病」小出他訳 岩波書店
- 1986 *Le Séminaire Livre 7 L'éthique de la psychanalyse*, Seuil
- 1992 *Le Séminaire Livre 8 Le transfert*, Seuil
- Luhmann, N. 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp=1993 「社会システム理論（上）」佐藤勉監訳 木鐸社
- Mead, G. H. 1934 *Mind, Self, and Society* =1973 「精神・自我・社会」稲葉三千男他訳 青木書店
- Miller, J. A. 1989 Michel Foucault et la psychanalyse, *Michel Foucault Philosophe*, Seuil
- 水川喜文 1993 「ポスト会話分析のエスノメソドロジー」（第64回日本社会学会発表報告）
- 森元孝 1988 「どうして普遍語用論だったか」『社会科学討究』34-2 早稲田大学
- 中野敏男 1993 『近代法システムと批判』 弘文社
- 西原和久 1993 「シュツツと発生論的相互行為論」『危機と再生の社会理論』マルジュ社
- 西阪仰 1987 「普遍語用論の周縁」『ハーバースと現代』新評論
- 岡野一郎 1993 「共有知識とコミュニケーション的行為」『ソシオロギス』17
- 大澤真幸 1993 「自己準拠の条件」『現代思想』9月号
- Sacks, H. 1992 *Lecturers on Conversation*, Blackwell
- 阪元俊生 1989 「トランス＝コンテクストと社会化」『現代社会学』14 アカデミア出版会
- 沢田康次 1993 「非平衡系の秩序と乱れ」朝倉書店
- Schegloff, E. A. 1988 *Goffman and the Analysis of Conversation*, *Erving Goffman*, Polity Press
- Sperry, D. & Wilson, D. 1986 *Relevance*, Harvard U. P.
- 鈴木良次 1991 『生物情報システム論』朝倉書店
- 竹中均 1993 「快の論理構造——エディプスコンプレックスのコミュニケーション的転換」『ソシオロギ』37-3
- Winnicott, D. W. 1971 *Playing and Reality* =1979 「遊ぶことと現実」橋本雅雄訳 岩崎学術出版社
- やまだようこ 1987 「ことばの前のことば」新曜社

(かしむら あいこ)